

小-37

猫伝染性腹膜炎にシクロスポリンを使用した猫の1例

○小山ますみ¹⁾ 足立真実²⁾ 五十嵐寛高³⁾ 玉本隆司²⁾

1) 酪農大附属動物医療センター 2) 酪農大伴侶動物医療学 3) 酪農大生体機能学

【はじめに】猫伝染性腹膜炎（FIP）は、いまだ有効な予防法もなく、治療法も確立されていない、致死的な疾患である。現在治療にはプレドニゾロンやインターフェロンが使用されるが、反応性は良好とは言えず、予後は悪い。近年、胸水を伴うFIPの症例に対し、シクロスポリンを使用し、効果が得られたとの報告がなされた。今回は、液体滲出を伴わない症例に対しシクロスポリンによる治療を試みたので、その概要を報告する。

【症例】症例は単独室内飼育のスコティッシュ・フォールド、10カ月齢、雌、体重1.98 kg。元気、食欲の低下と繰り返す下痢を主訴に来院した。血液検査では高グロブリン血症（TP8.0 g/dl、Alb2.6 g/dl）、ポリクローナルガンモパシー、SAAの上昇（3.9 μg/ml）、猫コロナウイルス抗体価の上昇（1600倍）を認めた。抗FIV抗体、FeLV抗原はともに陰性であった。腹部超音波検査では腸間膜リンパ節の腫大が認められた。さらにCT検査では、リンパ節の腫大の他に、腎臓に結節性病変を認めた。なお、腹水、胸水は確認されなかった。腫大した腸間膜リンパ節の針吸引生検を実施したところ、小型のリンパ球が主体で、リンパ芽球が散見された。マクロファージと思われる円形や類円形細胞も認められ、肉芽腫性リンパ節炎が疑われた。このような結果を総合的に判断し、FIPと診断した。治療当初はプレドニゾロンを1.26 mg/kg SIDで使用し、改善傾向にはあったものの、第23病日にはSAAが41.7 μg/mlと上昇したことからシクロスポリン併用を提案し、これまでのプレドニゾロンにシクロスポリン（12.8 mg/kg SID）を追加する形で開始した。投与後の第37病日、SAAが0.6 μg/mlと低下し、腹腔内リンパ節も縮小傾向にあることが確認された。現在も同様の治療にて経過観察を行っている。

【考察】シクロスポリンはin vitroでウイルス複製を抑制することが報告されており、有効な治療法となりうると期待される。今後の安定的な使用を目指すためにも、投与量などの確立が急がれるところである。今回の症例では、検査所見の改善など一定の効果は得られており、目立つ副作用はみられていない。ただし、体重減少が少しずつ進んでおり、今後の経過を慎重に見極めていく必要がある。